

現代インドにおける仏教改宗運動と「社会性」

——「エンゲイジド・ブッディズム」の観点から——

人間文化研究機構／龍谷大学 舟橋健太

1 目的・方法

本報告においては、インドにおける「エンゲイジド・ブッディズム」の代表として挙げられる B. R. アンベードカルによる仏教改宗と、彼の遺志を継いで連綿と行われている「不可触民」(ダリト)による仏教改宗運動に関して、特にその「社会性」に焦点をあてて検討・考察を行う。

「社会参加仏教」とも訳される「エンゲイジド・ブッディズム (Engaged Buddhism / Socially Engaged Buddhism)」に関しては、その特徴として、「社会性」を指摘することができる。近現代インドにおける事例から、B. R. アンベードカルによる仏教への大改宗、ならびに、仏教改宗運動の検討・分析から、これらにみられる「社会性」について考察する。

具体的には、アンベードカルの「宗教」ならびに「仏教」に関する言説をたどり、2004年から継続して行っている、北インドのウッタル・プラデーシュ州における現地調査から、改宗仏教徒たちの語りや実践、活動を検討する。

2 事例・結果

アンベードカルによる「仏教」解釈の特徴は、その「社会性」の主張にある。具体的には、「宗教」と「ダンマ」を峻別したうえで、後者を「社会を構築するための規則」とし、また、仏教の大目的として、「平等社会の実現」というものが設定されているとする。さらには、僧侶ならびにサンガの役割として、「社会・共同体に奉仕すべき存在」であることが強調される。加えて重要な特質として、アンベードカルの仏教改宗運動が、そもそもの発端として、社会的差別に対する異議申し立てという要素があり、またここから、「社会的認知」が主要な課題として浮上している点にある。

「社会的認知」の希求は、現代インドにおける仏教徒の実践や活動にも認めることができる。こうした諸実践・諸活動の事例は、グローバル、ナショナル、ローカルな場それぞれにおいて確認することができる。

3 結論

アンベードカルが強く言明した仏教の「社会性」と、彼の理念を受け継いで活動を行う現代インドの仏教改宗運動にみられる「社会的認知」の希求は、ともに、仏教とは何かという問いについて、また、仏教とともにある人びとの生の様態について、新たな考察可能性を開いていく契機となるものであろう。

文献

阿満利磨, 2003, 『社会をつくる仏教—エンゲイジド・ブッディズム—』人文書院。

アンベードカル, B. R., 2004, 『ブッダとそのダンマ』山際素男(訳), 光文社新書。

舟橋健太, 2014, 『現代インドに生きる〈改宗仏教徒〉—新たなアイデンティティを求める「不可触民」—』昭和堂。

ムコパディヤーヤ, ランジャナ, 2005, 『日本の社会参加仏教—法音寺と立正佼成会の社会活動と社会倫理—』東信堂。

Queen, Christopher S. and Sallie B. King (eds.), 1996, *Engaged Buddhism: Buddhist Liberation Movements in Asia*, Albany: State University of New York Press.